

作用（逆説的効果）があり、その機序は卵巣でのG受容体阻害によること、その原理を用いて妊娠極く初期婦人に analog を持続投与すると妊娠中絶に到ることを本学会で発表して来たが、今回、単に卵巣レベルばかりでなく、analog が子宮に直接作用し子宮レベルにも関わりをもつと考えられる知見を得、analog の投与期間と量の工夫により人工妊娠中絶への応用が可能であると判断され更に検討を加えた。

方法：妊娠中絶を希望する妊娠極く初期婦人に analog を連日投与し、妊娠に及ぼす LH-RH の analog の影響をホルモン動態、臨床経過より検討し、次に手術予定の子宮筋腫患者で妊娠した症例につき手術日迄 analog を投与し、ホルモン動態、摘出子宮につき、形態学的検索、ステロイド受容体測定を行った。

成績：妊娠反応陽性化した頃の極く初期妊娠では analog の数日投与により出血をきたし妊娠は終了した。妊娠週数が更に進んだ症例では必ずしも妊娠中絶には到らなかったが流産徴候がみられた。摘出子宮には絨毛部より出血壊死、胎児発育停止等がみられ、ステロイド受容体の著変がみられた。

独創点：LH-RH analog の逆説的効果は単に卵巣レベルの問題ではなく子宮に直接作用してステロイド受容体にも関与していること、形態的には analog 抗与により絨毛部出血壊死、胎児発育停止等、妊娠維持困難な様相を呈するに到ることより、analog の投与期間・量の調整により人工妊娠中絶への応用が可能であることを示唆した。

## 第57群 妊娠・分娩・産褥 VII (335～341)

### 335. 子宮内胎児形成不全症候群と流産

（東京医歯大）

一宮 和夫、飯泉美和子、今北 哲雄  
園 信義、木戸 豊、小山 嵩夫  
矢追 良正、西 望、斉藤 幹

少産少子の社会的背景と相俟つて、切迫流産に対する妊婦側の関心も高まり、医師側の対処にも著しい変化がみられている。切迫流産の予後については、種々のマーカーが知られているが、特に ME 機器の進歩、普及によつて、容易に早期診断ができるようになってきた。

昭和47年から昭和56年までに、当科に於いて妊娠前より BBT を記録し、受精卵日の推定可能な妊娠例を選択し、切迫流産患者の異常妊娠の実態の解明を試みた。

BBT を有する838例中、切迫流産症状を呈した228例（26.6%）についてその経過を追跡した。切迫流産症状を呈した患者は、原則として入院安静をとらせ、尿中 HCG 定量、超音波診断法等の臨床的検索を行い、流産例では、子宮内容物を病理学的に精査した。又、妊娠週数は排卵遅延がある場合には、排卵日起算で修正した。

切迫流産症状を呈した228例のうち、妊娠が継続し生児を得たものは134例（57.4%）であり、流産してしまったものは94例（41.2%）であつた。年齢分布からみ

た流産率では有意差はなかつたが、妊娠歴からみた流産率では、原発不妊で75%と有意に高かつた。

子宮出血開始週数と流産週数との関係では約82%が11週までに出血し67%が流産に至っている。流産した94例中89.4%が15週までに流産しておりそのうち86.9%に胎児を認めていない。生児を得た723例中、新生児の先天異常の出現率は、切迫流産群と、対照群では有意差はなかつた。

以上より、切迫流産症状を呈した症例の約半数は、流産に至ることが多く、子宮内容物の検索や、超音波診断法にても子宮内に胎児を認めない「子宮内胎児形成不全」の型をとることがわかつた。BBT をもとにした妊娠週数でも早期より超音波診断法による流産の診断が可能であると思われる。

336. 妊娠初期所謂「切迫流産」の超音波断層検査を用いた検討—子宮内出血・外出血・妊娠の転帰との関連について—

（国立名古屋病院）

後藤 濤二、朝日 治郎、黒木 尚之  
安江 弘之、戸谷 良造、鈴置 洋三  
（愛知・加藤病院）加藤 達夫

先の本学会（32, 33, 34回）での所謂切迫流産の検討を踏まえて、今回は、子宮内出血が超音波断層像上、low density echo ないし echo-free space（以下 efs）を示す事に着目し、この所見と外出血および妊娠の転